
約束します(陣×瑠架)

ルーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束します（陣×瑠架）

【Nコード】

N1581B

【作者名】

ルーラ

【あらすじ】

ずっと心に引っかかっていた出来事に悩む陣と、そんな陣を見て、元気にさせてあげたい、と思う瑠架の話です。

——お前たちを愛している、どうか自由に・・

——幸せになつてくれ・・・

「はあ」

陣がため息をついてソファにごろりと横になる。
頭に浮かぶのはこの言葉。

これは陣の師匠、凧が言ってくれた言葉。
だけど・・

「凧・・幸せって何だべ？」
陣は呟いた。

「魔界統一トーナメント」後、陣達は人間界にいた。

場所は、人間界に興味を持った陣・凍矢・鈴木・死々若達四人のため

蔵馬が借りてくれたマンション。

（人間界ではかなり金銭的価値のある魔界の特産物を彼らが持ってきたので、

蔵馬がそれを換金して借りた。）

今日は日曜日。自分たちのいるマンションに幽助と蔵馬が遊びに来
ていた。

正確には陣の事で相談に乗ってくれと凍矢に呼び出されたのだが。
扉からこっそりと陣の様子を覗き見る五人。

陣はため息をついてソファにだらりと横になって耳もしおれており、

心なしか彼を覆う風までどんよりしているように見える。
遊びに来た幽助と蔵馬を見て一時は元気になったものの、
心ここにあらずと言う感じでまた一人で部屋に閉じこもってしまったのだ。

普段の陣なら五人に見られている事などすぐ分かってしまうのであるが、

それすら気になっていないらしい。

「なあ・・・陣の奴本当にどうしちまったんだ？」

いつもなら一番元気な陣の、

あまりにも変わり果てた様子に幽助が丁度近くにいた蔵馬に聞く。

「そうですね・・・」

蔵馬も良く分からないと言った様子だ。

こうしていても埒が明かないので五人は別の部屋に移り相談する。

「この前凍矢と魔界に戻ると言って出て行った後、

ここに帰ってきてしばらくしたらああなってしまったのだ。なあ、

凍矢？」

死々若が簡単に説明するのを受けて凍矢が頷く。

「ああ・・・そう言えばお前達にも詳しい事は言ってなかったな。

実は画魔達の墓参りに行っていたんだが・・・」

凍矢が皆にこの前あった事を話す。

説明終了後。

「はーなるほど・・・死んだ師匠達に会ったんか・・・」

幽助がタバコの煙を吐きながらしみじみと言う。

「でもよお、幸せになれって言われたんだし、おめーらを恨んでる訳じゃねえんだろ？」

ならいいじゃねえか。」

「うむ、特に問題は無いと思われるが・・・？」

鈴木も首を縦に振り、幽助の意見を肯定する。

「ああ、もちろんその事じゃない。」

「なら何で？」

「実は、陣は自分の師だった風使い・・・風を本当に慕っていたんだ。」

「慕う？」

「つまり好きだったって事ですよ。」

と蔵馬が幽助に説明する。

「おいおい、陣のやつ自分の師匠に惚れてたんか!？」

「ああ。」

凍矢はさも当然と言うようにうなずいた。

「・・・どんな理由にせよ、あのままでは陣が哀れだ。」
と死々若。

「きつと、幻とは言え会ってしまったので、

陣にも色々と思うところがあったのでしょね。」

「多分、そうなのだと思う。」

凍矢は蔵馬の言葉に一つ頷いた。

「だが俺も、あいつの昔の事を詳しく知っている訳ではない。

彼女の事が原因でああなっているのは確かなのだが俺にも良く分かってなくてな。

そう言う感情についてはお前たちの方が詳しいだろう?」

そう言うて幽助と蔵馬の方に視線を向ける。

「詳しいってもよ・・・蔵馬、何とかしてやれねえか？」

「難しいですね・・・。」

困惑した表情を浮かべてしばし考え込む二人。

「そう言えば、

最後の戦いの前に一番弟子に奥義を託して部隊を維持するのではなかったか。」

と死々若。

「・・・そうだ。」

そう言うて静かに口を開いたのは元魔忍である凍矢。

そうでしたね、と蔵馬が頷きながら言う。

「でもよく考えてみると、タイミング良く戦いが起こるわけではないですし、

全ての忍が奥義を託したと言って戦闘で命を落とすとは限らないですよね？

そうだったらどうするんです？」

「ああ、任務を果たさず死ぬ事はあまりないからその確率の方が高いんだがな。

だが奥義を使えるものは一世代に一人、そう掟で決められていた。」
蔵馬が相変わらず鋭い指摘を行うので凍矢は苦笑する。

「普通は自ら死ぬか、望んで他者・・・と言っても多くは一番弟子の手にかかる。

・・・ごく稀に、奥義を継承したその弟子を師が殺して、新たに弟子をとる奴もいたらしいがな。」

「ふむ、だがいくら弟子を取ると言っても

魔忍は自分になりたいと望んでなれるもんでもなかっただろう？
どうやって選ぶんだ？」

鈴木が首を傾げて言う。

「ああ、捨てられていたり、襲撃先にいた赤ん坊や物心ついていない子供を拾うか、

さらつかして育てる。」

それが、魔忍には血による絆も、情もないと言われる由縁だった。
もちろん血など関係ないほど強い絆で結ばれる事もあるのだが。

ふうつとため息をついて続けた。

「弟子を自分の後継者として慈しむか、

自分の地位を脅かす危険な存在として見るかはそいつの器次第だ。
弟子にしたいと思うものが現れるのが遅ければ、弟子をとる時期は自然と遅くなる。

・・・それまで生き長らえればの話だが」

「ケツんな中途半端な掟なんか作るなってんだよね。」

幽助が幾分苛立った口調で口を挟む。

恐らく自分と幻海師範の事を思い出し、そのあまりの違いに気付いたのだろう。

「おめーはどうだったんだ？」

「俺の師は厳しい方だったが、どちらかと言えば前者だった。」

凍矢の頭に先代の姿が浮かぶ。

冴え冴えとした青い色の長い髪と同色の冷たい瞳。

端正な顔。

背が高くがっしりとした体格の、誇り高く強かった我が師。

「そっか、良かったぜ。けどそうじゃない奴は大変だな。」

幽助が呆れたように言う。

「今はそんなんじゃないかって良かったなおめーら。」

「ああ、まっただ。」

凍矢は目を細めて幽助を見る。

事実、当時も掟については違和感を感じていた。

そして今の自分にとって更にくおかしなものゝ以外何でもなかった陣にしてみれば初めからそうだったようだが。

凍矢はくだらない勢力争いを魔界統一トーナメントと言う形で一掃してくれ、

それを利用して自分たちを結果的に解き放ってくれた張本人に対して

穏やかな眼差しを向ける。

本人は自分がした事の大きさに気付いていないようだが、

幽助に救われたのはここにいる自分たちだけでは決してないのだ。

「陣は・・・いえ、凧は奥義を託した後どうなったんです？」

もし陣の手にかかる事を望んだのなら、

師を慕っていたらしい陣にとってこれほど悲惨なものはなかっただろう。

「死んだ事に変わりはない。俺も詳しくは知らないが、

最初凧は陣にすら告げず一人で死ぬ事を考えていたようだった。」

凧は凍矢が任務に行こうとする直前、自分に弟子がいることを伝え、弟子を頼むと言い置いて去っていった。

今から考えれば多分、あのまま死ぬ気だったのだろう。

事実、任務から帰ってきたら凧はもういなかった。

「陣は、いなくなつた凧を探して呼び続けていた。

・・・やはりその時は、彼女が死に行つたのだと知らなかったらしい。」

死んだであろう事を知らずに彼女の名を呼び続けるその様子は、見ていた自分の方が辛かった。

だが、

陣に自分が死ぬ運命にあることを直接告げなかったのは賢明だったと言える。

「見かねた俺が彼女はおそらく死んだのだと告げたら、彼女に会いたいと言つて探しに行つてしまつた・・・

その後まだ生きていた彼女を見つけたようだ。

陣はおそらく凧に直接手を下していない。だが、死ぬ瞬間を見ていたらしい。」

「そうか・・・」

辛かつたろうな・・・と付け足して、鈴木が今にも涙を流さんばかりに言う。

自分の愛しいものが目の前で失われるとなれば誰だつてショックは大きいだろう。

「いや、陣は案外さつぱりしていた。だからあいつは・・・けりをつけていたんだと思う。」

凍矢が、凧を探しに行くと言つたきり帰つて来なかつた陣を偶然見つけた時、

陣はぼんやりと凧が埋められていた場所

（おそらく陣が自ら埋めた）の前に座り込んでいた。

見ていた自分に気付き、安らかに逝つたと告げた時も、陣の目に涙は無かつた。

だが、真意は分からない。

「よくけりなんてつけたな。」

横から幽助が口を出す。

「ああ、それで壊れているようでは忍として使い物にならない。

耐える器がないと魔忍はやってられんのだ。そう育てられるからな。

」

凍矢は心の中で苦笑しながら言う。

「そーゆーもんか？」

「・・・俺も今は・・・耐える自信はない。」

「ふーん、けど、それでいいんじゃない？」

「そう思う。」

凍矢が幽助の言葉を受けて頷いた。

「だが風の場合は少し違っていたようだ。

・・・あいつは元々、他の修羅の連中とは違う奴だった。

弟子の育て方も多少違ったんだろう。」

長い、ガラスの様なエメラルド色の髪。

同色の翡翠のような瞳に尖った耳。

瘦身優美な一族の生き残り。

（まともな奴は、弟子を取ることを拒むものなんだそうだ。・・・後

悔するからな。）

彼女がいなくなる数日前の言葉。

（これはお前の師に言われた。・・・そして私の師が言っていた言

葉だそうだ。）

弟子をとる事は掟だろう、

いずれはお前だって俺だってとらなくてはいけないのだと自分は言

った。

・・・そのとき既に、彼女に弟子がいたとは知らずに。

「だが、陣を大事にしていたらしい事に変わりはない。」

（・・・掟だからと言って割り切れないこともある。そのうち分かるさ・・・。）

今なら分かる。陣を大切にしていたのなら、

陣を闇の世界に入れる事でどんなに苦しんだだろうか。

誰が自分の大切なものの手を汚させる事を喜ぶだろうか。

もしかしたら先代も・

「それで陣はあんなに元気なのだな。」

と頷きながら言う鈴木。その言葉にはつととして凍矢は我に返る。

「最初見たとき本当にこいつ忍か？つて思っちまったし・」

幽助が最初に陣に出会ったときの事を思い出しながら言う。

「それは俺も同感だったぞ。」

と、凍矢。

「あー！ー事思いついたぜー！」

幽助が突然立ち上がり、どこやらに電話し始めた。

「——っつー訳なんだよ。おめーにとっちやいい話だろ？」

ああ、ここの場所は・・うんうん、忙しかったらしゃーねえけど・

・

あ、いいって？サンキューー！じゃ、頼んだぜ。」

ガチャン！と受話器を置く。

「誰に電話してたんです？」

「ここに来ていつて言ったから来るぜ。ただ仕事忙しいつつてたから遅くなるけどな、

そんな時のお楽しみだ。」

幽助がニヤついて言う。

「まさか医者とか言う奴ではないだろうな？陣は人間ではないぞ。」

「ちげーよ死々若、ああやって悩めるヤローを癒すスペシャリストだ。」

やっぱ女がらみなら女に任せるのが一番だろっ

と言う幽助の言葉にかすかな不安を覚えながらも一同はそれ以上の追求をやめ、

その人物（どうやら女性らしい。）が来るのを待つ事にした。

数時間後。

ピンポン！とチャイムが鳴る。

外はもう夕焼けが消えかかってしまっていた。

「お！来た来た！」

幽助が立ち上がり玄関へ向かう。

そして幽助が連れてきたのは深い帽子を被り、長いコートを羽織った女。

彼女がその帽子を取る。

そこから現れたのは・・・

艶やかでわずかにウェーブがかった長いピンクの髪を持つ美女。次にコートを脱ぐとシンプルな服を着ているものの、さり気なくスタイル抜群なのが良く分かる。

テレビで大活躍中の「カルト三人組」のメンバーの一人、現在男性が癒して欲しいと思うアイドルNO.1瑠架だった。

「結界師？」

意外な人物の訪問に凍矢は目を丸くする。

「瑠架、ですわ。」

凍矢さんこんばんは。あら鈴木さん、死々若丸さん、蔵馬さんまで・・・こんばんは。」

につこりと瑠架が笑い、一同に対し丁寧に挨拶をする。

「ああ・・・」

鈴木が苦笑して答える。

蔵馬も死々若も意外そうな顔をして瑠架を見た。

ここにいる凍矢と鈴木と死々若の三人は、

暗黒武術大会の時瑠架に怪我を治療してもらったことがある。

「それで、患者さんはどちらに？」

「ああ、あそこの部屋ん中だ。」

幽助が陣のいる部屋を指差す。

それを聞いた途端、瑠架の顔つきが真剣になる。

「元気付けてやってくれよな。頼んだぜ！」

幽助がにっと笑って瑠架に向かい手を振る。

「はい、やってみますわ。」

幽助に微笑みを返して陣のいる部屋に入っていく。

「……。」

「……。」

押し黙って幽助を見る凍矢と死々若。

「二人ともそんな目で見るなって。別にやましー事考えてた訳じゃないぜ？」

「ならどう言うつもりなんです？確かに彼女は癒し系アイドルNO.1ですが……。」

テレビでそんな事を言っていたなと蔵馬は思い出した。

「いや、それがよ、

瑠架の奴はどうやら暗黒武術大会の時からずっと陣に惚れてたらしめて

協力しろって言われてな。

あいつ看護婦もしてたし丁度いいと思ったんだ。」

幽助はラーメン屋傍ら妖怪関係の問題を解決する「始末屋」を兼業しているはずなのだが、

いつの間にやらカルト三人と相談しつつ彼女達のサイン、

物品をファンに売るなどの副職もしててかなり仲良くなっていた。

他のカルトメンバーにも協力しろと言われている事は、

今はとりあえず黙っておこうと幽助は決めた。

「へえ、それは初耳です。」

蔵馬が興味深そうに幽助を見る。

「ほほう、ならばこの私が惚れ薬を作ってやるか。瑠架には昔世話になったしな。」

鈴木が何やら腕を組んで考え始めた。

「やめろ。」

凍矢が冷静に突っ込む。

「まーまー落ち着けて。でもこれっていい考えだろ？」

「そうですね、上手くいく事を祈りましょう。・・・全ては彼女次第ですよ。」

蔵馬が締めくくり、五人は陣の部屋に耳を近づけ様子を伺った。

一方こちらは陣のいる部屋。

陣は長々とソファに寝そべっていたが、

人が入ってくる気配がしたので身体を起こした。

「ん？おめー誰だ？どつかで見たことが・・・あ、大会ん時の結果師のねーちゃん。」

「覚えていてくださって嬉しいです・・・瑠架、でございます。」
にこりと笑いかけて瑠架が答える。

「何でここに？」

キョトンとして陣が聞く。

瑠架がここに来る理由は何も思いつかなかった。

「幽助さんにあなたを元氣付けるよう頼まれましたの。・・・お隣座つてもよろしくて？」

「幽助が？」

陣は首を傾げ、まだ納得してないような感じではあったが、
とりあえず瑠架が座れるぐらいのスペースを空けた。
そこに上品に座る瑠架。

「皆さん心配してますわ、どうかなさいましたの？」

「何でも無いだよ・・・。」

陣はそう言うが、声からして明らかに元氣が無い。

「何か、悩んでらっしゃるのでは？」

「え？どうして分かるだ！？」

と、陣が目丸くする。

「やはりそうなのですね。」

瑠架は一つ頷く。

「どうか話してくださいな、話を聞くぐらいならできます。誰かに話すだけでも多少は楽になると思いますわ。」

「そうだべか？んー・・・」

陣はしばらく渋ったが、とうとう話し始めた。

「実はな、オラこの前風と言われた言葉が気になって仕方ないんだべ。」

「風・・・？」

初めて聞く名に瑠架はちよつと首を傾げる。

「オラの師匠だ。」

そう言った陣の顔にほんの少し笑みが浮かんだ。

「まあ、その方に何を言われたんです？」

「『幸せになつてくれ』って言われた。」

「？・・・それがどうして悩む事なんですか？」

心の中で首を傾げる。

幸せを望んでくれる言葉のどこに悩む必要があるのか良く分からなかった。

「風がどうしてそれを言うのか分からなねえからだべ。」

「・・・その方にもう一度、どうして言ったのか聞けばよろしいのでは？」

「もういねえ、ずーっと前に死んだだよ。」

「？」

この前言われたのでは・・・と言いかけて止める。

瑠架の頭の中に、

暗黒武術大会でちらりと小耳に挟んだ魔忍のく掟の事が浮かび上がる。

まずい事を聞いてしまったかと思ったが陣はそのまま続けた。

「でも、この前会ったんだべ。」

「？？え？ええ・・・。」

夢を見たか、幻を見たのか。

瑠架は心の中でさらに首を傾げたが、無理やり納得してとりあえず

続きを待つ。

「そんな時に言われただ。でも、よく分かんないだよ」

「ええと・・・それは陣さんが幸せになってくれることを望んでいるから・・・。」

「ちがうだ、幸せって何だべ？」

「あ・・・。」

確かにそうだ、と思い口を閉じる。

この問いを聞かれて、すぐに答えられる者はそんなにいないにちがいない。

瑠架が返答に詰まっていると、陣が自分の頭を抱え込んだ。

「うっっ考えてもよくわかんねえ。・・・うんにゃ、何となくは分かるんだけど・・・。」

「では、その考えを聞かせてくださいな。」

それを聞いて、パツと頭を抱え込む事をやめると陣は話し始めた。

「んーとな、風が生きていた頃はオラいつも風にくつついてた。

風の側はあつたかくて気持ちよくて・・・

オラは風が居てくれるだけで何の不満も無かった。

大きくなったら風を嫁さんにするんだ・・・ってよく言ってた。

幽助たちという時とはちよつと違う気持ちだったべ。

風としないとあんな・・・

なんつーか強くなる事とは別に満足した気持ちにはなれなかった。だからオラは、

あんな気持ちになれるのが幸せっつーもんなんだろうなっと思って思うだよ。」

「はい・・・。」

「でもな、風はもういないだろ。どうすりゃいいべ？」
そう言つて陣は首を傾げる。

彼女は死んだ。それも、ずっと昔に。

風がないとあんな気持ちになる事は出来ないのに。
そう言うなら、自分の側にいてくれればいいものを。

「・・・陣さん・・・」

瑠架は、陣の話はよく理解できなかったのだが言いたい事は漠然と分かった。

この時自分の中に湧いてきた感情は何だったのか。

ふいに、片手を伸ばしてそつと彼の背を撫でてみる。

何となくそうしてみたくなったのだ。

「わわっ」

陣が驚いて身を引く。

「ごめんなさい、ちよつとこうしてみたかったの。・・・嫌かしら？」

「そんな事はねーけど・・・」

そう言つてまた坐り直すと、おとなしく瑠架に撫でられる。

それと同時に

瑠架の手の温かさや自分をいたわってくれていると言う気持ちが伝わって来て、

こんな温かさは幽助たちという時に感じることは出来ないな、と思う。

撫でられるのは小さい頃に戻った気分がして少しくすぐったかったけれど、

とてもとても嬉しいもので。

「瑠架、ありがとな。おめー優しいなあ。」

「氣に入ってもらえたなら嬉しいです。」

陣の言葉に、瑠架にも思わず笑みがこぼれる。

「風もよくそうやってくれただよ。」

その言葉を聞いた途端、ふいに瑠架の手が止まる。

胸の奥が少しだけ痛んだ。

「どーした？」

「あ、いえ、何でもありません。」

自分を見つめてくる陣に対し瑠架は慌てて笑みを作る。

だが、陣はなお不思議そうに瑠架の顔を覗く。

「・・・？悲しいのか？」

「え？どうして？」

瑠架は図星をさされてドキツとした。

「瑠架から悲しいって風が・・・」

「・・・ふふっ本当に何でもないわ、大丈夫です。」

心配そうな陣に笑いかけてから、撫でていた手をそつと離す。

「陣さん、その・・・いい事を思いついたの。聞いてくれるかしら？」

「ん？」

「あの・・・私、私が・・・」

瑠架は言いながら自分の顔が熱くなるのが分かった。

また陣が覗き込むように見てくるので、慌てて陣から顔をそらす。

「？どーしただ？顔真つ赤だべ。」

「その、私では・・・あなたの師匠様の代わりになれないかしら？つて・・・思つたの。」

その言葉を聞いた途端、陣はキョトンとして瑠架を見た。

「・・・陣さん？」

反応が無くて少し戸惑いながら陣の方を見る。

すると陣は淋しそうな微笑をたたえて瑠架を見つめていた。

「風の代わりは、誰にも出来ねえ。」

ぽつんと、一言だけ呟いた。

瑠架の胸にその言葉がぐさりと突き刺さる。

「そう・・・ですよね。」

陣から慌てて顔をそらす。

「ごめんなさい、バカな事を言いました。」
「いないのなら、」

それで淋しいなら代わりになる相手を見つければいいのではと思つた。

そう言えばもしかしたら自分を彼女と同じように見てくれるようになるのではと、

安易に考えていた事も否めないが。

だが、そんな簡単な問題ではないのだ。少なくとも彼にとっては。何て自分は馬鹿な発言をしたのだと、今更のように後悔した。

「そうじゃねえ。瑠架は瑠架だ、他の誰にも代えられねえだろ。」

瑠架は陣の言葉を聞いて、彼の顔を見つめなおした。

自分を見ているその顔はとても穏やかで優しい。

「これ、風の受け売りだけだな。」

陣は軽くのびをして、笑いながら言った。

「だから、な。そんな事言ったらだめなんだべ。」

「ええ、分かったわ。」

頷いて言って、陣に微笑みかける。

彼のその笑顔を見ていると、何だか気分が軽くなった気がした。

「って生意気なこと言っちゃまったかな。気に障ったらごめんな？」

「まさか！・・・嬉しかったです。」

自分がどうして彼に惹かれたのか再確認できた気がした。

失われたものは・・・それが大切であればあるほど代わりが利くわけではない。

当たり前と知っているけれど他に代わりを求めてしまうものなのに、その誘惑に負けずちゃんと受け止める強さを持っている。

「そうか？なら良かった。でも・・・んー・・・」

「どうしたんです？」

「さっき、一瞬昔のオラを思い出しちゃった。」

「昔・・・ですか。」

「何でだろな。」

「え？」

「えらそうな事言っただけ、本当は人の事言えないんだべ。」

「そうなんですか？」

瑠架の疑問が伝わったかのように陣が苦笑して、一つ肯く。

「ああ。オラはひどい事何回も風に行った。」

「え？」

「凧はオラなんか邪魔なんだ、嫌いなんだ、オラより任務が大事なんだってな。」

あつそーそー凧なんか嫌いだよとかも言っただ。
ガキの頃の事だけど、ひつでー言いかただべ？」

もし凧が自分を邪魔だと思っていたら・・・とつくに殺されていた。
そう言う集団なのだと知ったのは、凧が死んでからだったから。

「凧はな、オラが泣いてしがみついてそう言うもんだから
そのたんびにオラをすごく悲しそうに見てた。

本当に邪魔ならその時ぶったり蹴ったりするだろ？

でも、そんな事一度もされた事無い。

泣き止むまでずっとオラの事抱きしめて撫でてくれた。」

陣の頭の中に甦ってくるのは自分が凧に育てられていた遠く幼い日々のこと。

こんなにはつきりと思い浮かぶのに。

「まあ・・・。」

「オラばっか喋ってんな。」

陣が頭をかいて申し訳なさそうな顔をする。

「いいえ、宜しければ色々と聞かせてくださいな。」

彼から話を聞けば、そうすれば彼女の事がもつとよく分かるだろう。
おそらく一番彼を元気付けれるのは彼女しかない。

でも、それは不可能だから。

彼女の事をよく知れば、彼にとって一番いいアドバイスも出来るでしょう。

「そーか？でも、つまんないべ？」

「まさか、私が知りたいんですから。」

「うー・・・そうか？えつと凧はよくぼんやり考え事してた。

凧には大事に思ってる奴らがいて、そんな時はいつもそいつらの事を
思い出してるみたいだった。凧は自分からは全然自分の事話さな
ったけど・・・

一度だけそんな事を言った事がある。」

まだよちよちとおぼつかない足取りで歩いていた小さい頃。

お気に入りの凧の膝の上にちょこんと座り、

心配そうな色を瞳いっぱいに浮かべて見上げる。

あれは、何度目かに凧が考え事をしていたときの事。

凧が考え事をしている時、

表情には出ないものの彼女を覆う風が悲しい、悲しいと言っていた。そんな凧を見ているのは、当時の自分にとってたまらない苦痛だった。

そこで陣は言葉をきつて、少し俯いて話を続ける。

「オラはそれを聞いてから、凧が考え事する度に怒った。

いんや、凧が任務に行くつて言ったときのほうがすごかったべ。」

困ったように自分を見つめる凧の表情がひどく印象的だった。

自分は、凧が任務に出ようとするとするたびにひどく泣いて怒る。

待っている間が淋しくてたまらなくて。

だから、任務に行かせないようあらんかぎりの力で凧にしがみついて離さない。

そんな自分を抱いて、撫でて、凧は黙って自分の声を聞いている。

自分が泣き疲れて寝てしまうまで・・・ずっと。

柔らかい・・・温かい感触が伝わって来る。

「でも、オラがああいう事言つたびに『バカを言つな、大切に決まっているだろう。』

お前は何にも代えられん・・・」って笑いながら言われた。

けど、その時はその言葉の意味を考えもしねえ。結局泣き疲れて寝ちまうんだ。」

そして、起きると寝台に寝かされていて凧はもういなかった。

いつ帰ってくるのか、もしかしたら二度と会えないかもしれない。

幼心に凧は危険に身をさらしているのだと知っていた。

どれほど彼女が扉を開けて入ってくるのを待ちわびただろう。

さすがに力もついて、更に色々な事が分かってきたらそんな事はな

くなつたけれど。

「風のあの言葉と、

風に抱きしめてもらうの好きだったから困るの知っててわざと言つてた。

悪ガキだべな。」

彼女が帰ってくる、自分は文句を言うより先に飛びついていく。風もそれが分かっているから住処に入つて来ると膝をついてかがんで、

自分が甘えて伸ばす両腕が首に届くようにしてくれる。

そこに自分は両腕を絡ませて、精一杯彼女にしがみつく。

二度と離さないかのように。

命令には絶対に従えという掟があるなど知らなかったし、おそらく教えられても理解できなかっただろう。

これは他の魔忍が弟子をどのように育てているか、自分がどれほど風に慈しまれていたかすらわからなかった頃の事だけれど。

「いいえ、私は陣さんの気持ち、よく分かります。」

「そうか？」

「ええ。」

瑠架は笑いながら頷いた。

それに、と瑠架は思う。

彼と風は単なる師弟関係ではなく親子のような関係だったのだろう。元々彼のその素直さ、明るさは天性のものだと思っていたのだが、妖怪であれ人格形成は幼い頃の環境に影響されるものだ。

考えてみれば、いくら天性で明るさを持っていたても、

魔界で冷酷非情と恐れられていた修羅の一員だったものが、普通に闇の世界で育てられ、

暮らしていたのならここまで感情を失わずにいられる訳はない。

瑠架自身は闇の世界について暗黒武術会などを通してそこまで詳しい訳ではない。

けれど、考えれば分かる事もあるわ・・・と心の中で自問自答する。
恐らく彼がある程度成長するまでの環境は、ひどく優しいものだったのだろう。

そしてそうさせたのは凧だ。

そこまで考えて瑠架は正直感心していた。そして改めて言う。

「本当に、素敵な師匠様だったんですね。」

「ああ。」

陣がその言葉を聞いて嬉しそうに笑った。

「何と言う美しい話だ・・・ぐ！」

鈴木が叫びそうになるのを見て死々若が蹴りを入れる。

「な・・・何をする！」

死々若に向かつて鈴木が小声で怒鳴る。

「うるさい、気付かれてしまっただろうが。」

「な〜んか、蔵馬とおふくろさんの話思い出しちまうな〜。」

「そうですね。」

幽助の言葉を受けて蔵馬が微笑む。

そして一同は再びドアの周辺に張り付いて耳を澄ます。

陣を見つめながら瑠架は考える。

実際、瑠架から見ても陣の様子や、

さっきの話から推測しても凧は相当陣を大切にしていたのだろう。

だが、このままでは凧の、彼を想う心が無駄になってしまふのではと思う。

絶対に凧は自分の事で弟子を苦しませようなどとは思っていないはずだ。

彼女はきつと・・・

「じゃあ、私からも言わせてもらっていいですか？」

「ん？」

「・・・陣さんは、凧さんが大切ですか？」

「当ったり前だべ。オラを拾って育ててくれた、いつも優しくしてくれた・・・。」

「なら、彼女も当然陣さんの事を大切に思っていた・・・そうでは無いですか？」

「ああ。何度もそう言ってくれた。」

陣が頷きながら言う。

「では、考えてみて下さい。」

そんな彼女が、陣さんが苦しむことを望んでいると思います？。」

「違うべ、凧はいつもオラの事を考えていてくれた・・・。」

陣はそこまで言って黙った。

「・・・きつと、凧さんは今悲しんでいらっしやるわ。」

何やら気付いた様子の陣を見て、更に優しく瑠架は言う。

「だってそうでしょう？大切な弟子が、自分の言った事を無視して悲しんで苦しんで友達にも心配かけているんです。」

私、陣さんの話を聞いてて

凧さんが陣さんをどんなに大切にしていたかよく分かりましたから。

「

瑠架がそういった瞬間、陣はハツとした。

自分は凧がいらないと言う事に気を取られてて肝心な事を忘れていたな、と思う。

凧は幸せになれと言ったのだ。

けれど今の自分は・・・

「そうだなあ・・・。」

陣は俯いて、瑠架の言葉をよく考えてみる。

幸せ自体が良く分からないが、

分からないなりに今の自分の状態は幸せとは違うと分かる。

「瑠架の言うとおりだべ。」

瑠架からは、そう言っただけで俯いた彼の表情は分からなかった。

だが目を拭いて顔を上げた陣は感心したように瑠架を見つめた。

「瑠架はすげー！色々分かるんだなあ。ありがとな、ものすげー元気出たぞ。」

「ふふっ……」

「なあなあ、瑠架は『幸せ』ってどんなんだと思う？どうしたらなれる？」

陣が首を傾げて聞いてくる。

「……知りたいですか？」

瑠架は少し悪戯っぽく上目遣いに彼を見た。

「ああ。」

と、陣が素直に頷いたので。

「私と一緒にいてくれたら分かります……私が教えて差し上げますわ。」

本当はちゃんと教えられるか少し不安なのですが……。」

と陣の目を見つめて、かつ真剣に言った。

「そっか！なら約束な。人間界じゃこうするんだべ。知ってるか？」

陣は瑠架の言葉に目を輝かせ、

嬉々として自分の小指を立てて瑠架に差し出した。

「ええ、もちろんです。」

彼の言葉にクスツと笑って、

差し出された陣の小指に自分の小指を絡ませて軽く上下に揺らす。

「ずっと一緒にいましょうね……。」

瑠架はそっと呟いた。

そして、今でも彼を見守っているであろう彼女に心の中でもう一言呟く。

風さん、どうか安心して下さいね。

（後書き）

凧とは「OBLAT」というサイトにある「Beyond the time」と言う小説に出てくるオリキャラです。作者様の了解を得て使用させて頂きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1581b/>

約束します(陣×瑠架)

2010年10月28日04時13分発行